『大和物語』の「菟原処女（うないおとめ）悲恋伝説」と生田川

東灘区御影塚町の静かな住宅街の中に、古墳時代前期に築かれた南向きの全長 70 ㍍の前方後方墳が現存する。処女塚（おとめづか）というこの古墳を中心に、東西約２㎞の同じ距離の所に東求女塚（住吉）と西求女塚（西灘）という古墳があり、これら三基の古墳には古い言い伝えが今日まで時代を超えて伝わっている。

この伝説は、ひとりの女性をめぐる悲恋物語で、その昔万葉の歌人たちが歌にまで詠んだ話でもある。中でも高橋虫麿の歌にその内容があらわれており、それによれば、むかし、このあたりに絶世の美女が住んでおり、名を菟原処女（うないおとめ）といった。その美貌は遠方にまで知れ渡り、多くの男性から結婚の申し込みが絶えなかったという。そうした申し込みを悉く断ってきた菟原処女であったが、その中の二人の男性だけは、断られても、断られても求婚を繰り返したのである。その二人とは、地元の菟原壮士（うないおとこ）と和泉国の血沼壮士（ちぬおとこ）［小竹田壮士（しのだおとこ）］であった。二人の求婚レースはとどまるところを知らず、挙句の果てには太刀を握り、弓をとり争うまでに至ったのである。それを見た処女は、私のようなもののために立派な若者を争わせたのではこの世で誰とも結婚できないと考え、あの世で待っていますと母親に告げて自ら生命をたったのであった。その夜、血沼壮士の見た夢の中に処女があらわれたことから、実は自分のことを愛していたのだと思った血沼壮士は処女のあとを追って生命を絶ってしまった。血沼壮士の後追い自殺の知らせを聞いた菟原壮士はくやしがり、彼もすぐに後を追って死んでしまった。そのため縁者が集まって、菟原処女の墓を中心にして、東西等間隔の場所に処女の墓へと向き合う形で、東に血沼壮士（東求女塚）、西に菟原壮士（西求女塚）の墓を造ったと、虫麿は歌っているのである。また、万葉の歌人、大伴家持や田辺福麿などもこの話を素材に、歌を詠んでおり、中でも田辺福麿の「古への小竹田壮士の妻問ひし　菟会処女の奥津城ぞこれ」の歌碑が現在、処女塚の西のわきに置かれている。

ところで、この悲恋伝説は多くの人々の心をうち、後世にまで受け継がれて行き、文学作品の素材にまでなったのである。平安時代には、『大和物語』のなかにこの話が入り、舞台も生田川に移し、話が膨らんでいった。争った二人の男性は決着をつけるために、生田川に浮かぶ水鳥を射抜いた方と結婚を許すという処女の親の出した案を受け入れ、両者が同時に弓を射たところ、両方の矢がこれまた一羽の水鳥を同時に射抜いてしまったのである。結局決着はつかず、三人の若者は生田川に身を投げて死んだという話へと広がっていってしまった。なぜ大和物語で、舞台を東灘からこの生田川に移したのかは詳らかではないが、物語の中で菟原処女が読んだ「すみわびぬわが身投げてむ津の国の生田の川は名のみなりけり」の歌にあるよう、この段の物語の落ちを「死んでいくのに生田とはつれないことだ」というように締めくくるため、「生田川」に舞台をもとめたのではなかろうか。

さらに、室町時代には謡曲『求塚（もとめづか）』、明治時代に入ると森鴎外が戯曲『生田川』、大正時代には菊池寛が『慈悲心鳥（じひしんちょう）』という具合に、多くの作品の素材として使われていくことになるのである。

しかし、処女塚を中心に東西二つの求女塚のこれら三基の古墳は考古学的に見て、異なっ

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著

『大和物語』の「菟原処女（うないおとめ）悲恋伝説」と生田川

た時代につくられており、これら一連の菟原処女にまつわる悲恋話は真実であるとは言い難い。おそらくは、これら三基の古墳も古墳時代にこれらの地域を支配した豪族の墓と考えられている。古墳が造られてから数百年たって、誰が埋葬されているかも分からなくなった奈良時代の人々が、ロマンを求めて伝えていた説話であろうと考えられる。ただ、この悲恋伝説は史実ではないが、万葉の昔から今日まで語り伝えられてきたという事実はいずれにせよ大事にしなければならず、こうした伝説を次の世代へと語り継いでいくことが我々に課せられた責務ではないだろうか。

　なお、生田川周辺の地元住民が近年、大和物語によって伝説の舞台が生田川に移ったことを示そうと「大和物語　生田川之段　処女塚伝承之地」を神若橋西側に建立した。

処女塚伝承之地の碑

出典：「神戸歴史トリップ」道谷 卓 著